

第 3 回検討会議における主な意見等

第3回検討会議における主な意見等

第3回会議検討委員会では、特別支援教育の充実、幼小連携の推進や幼稚園教諭等の資質向上について各委員から以下のような意見がだされました。

(1) 特別支援教育の充実について

◆ことばの教室の拡充とあゆみの教室の拡充を令和4年度から令和5年度に6園及び西区・東区に設置するとあるが、一度に開設するというのは、職員研修の課題がある。段階的に設置拡充し、職員を養成するとともにノウハウを吸収して、次の幼稚園に開設するという段階的な開設が必要。

◆ことばの教室、あゆみの教室では言語と情緒と専門性が異なる。また、特別支援学校教諭の取得を推進とあるが年数かかる。段階的に拡充していくことが必要。対応できる職員がないのが一番子供にとってマイナスである。

◆ことばの教室、あゆみの教室についての対象は5歳児で、幼児の状態という概ねが通常学級に進学される幼児を対象とすると考えていいのか。

◆人員の確保が最も重要。令和3年度はことばの教室を希望する幼児を全員受け入れたが、1学期末の指導計画の結果、指導がいきつかなかったという意見があった。

◆全12人の指導員のうち11名がことばの教室の指導経験がある。また、1名は言語聴覚士。現場で先輩に教えてもらったり、自分たちで研修したり、OJT等互いの力で学んでいる。通級指導教室が分散されてどれくらいのニーズがあるのか、不安に思っている指導員もある。また、空き教室が3つある幼稚園もあれば0の幼稚園もある。しかし、この機を逃して各園に開設できないのはとても残念。この機会で各園に開設してほしいと考えている。特別支援学級の設置や重度心身障害児や医療的ケア児の受け入れは、現状ではかなり厳しいと思う。人材育成、場所、計画しっかり立てても、日々子どもたちの命を預かっているという重い責任を負っている現状。

(2) 幼小連携について

◆幼児教育で実践されている自ら選ぶ遊びや主体的な遊び、そういう経験が、小学校との段差はあるが、そこをジャンプする力をつけることが必要。子供たちは幼稚園でしっかりそういう愛情を受けて一人一人、自分の思いを十分に押し出していると小学校に入ってから生き生きと学ぶことができる。具体的に言うと、幼稚園で砂遊びや栽培活動しておくと、1年生で朝顔を育てる際、機械的に朝顔は見えるが、今度はタブレットで撮って拡大して、細かな観察記録を付けたり、毎日、水をあげたりというように学びつながっている。小学校は勉強ばかりみたいと言われるが、子供たちはとても楽しく学んでいる。こういうジャンプする力をしっかり幼児期の教育の中で蓄えていることをお互いに理解する必要がある。小学校も幼児教育に感謝し、幼稚園の先生方も自信を持ってジャンプさせてほしい。小学校側もしっかり受け止める。それこそ、幼小連携の意図だと思っている。

◆本来なら昨年からはまる予定だったスタートカリキュラムがコロナ禍の突然の休校等でうまくいかなかったが、アプローチカリキュラムからスタートカリキュラムにつながるというような施策で文科省もやって行く予定であった。そういう接続がうまくいけば、幼児期からジャンプできる主体的で深い学びができればいいと思う。障害のあるなしに関わらずそこは繋がっていくべきである。

(3) 幼小連携について【移行支援シート・就学支援シート】

◆移行支援シート等については、幼稚園では、保護者と個人懇談をして年長時の夏休みが終わったところに、保護者に説明し、話し合いの中で引き継ぐ内容や有効だった指導について提出している。急遽転居された園児が、移行支援シートを転居先に提出したことで接続がうまくできたと保護者から聞いた。

◆就学支援シートは保護者の方が自分の子どもを客観的にみるということで始まったが、このシートが学校でどのように活用されているのか。

◆保護者が移行支援シートや就学支援シートを持参し、小学校のコーディネーターや先生方とシートを元に互いに探っていく作業。移行支援シート等の提出があった児童は、一人ひとりファイリングし、これで終わる児童もいるし、個別の支援計画を作成した場合はその計画が積みあがっていく児童もいる。幼稚園や保護者にお尋ねすることもある。記載してある内容は、園によって差があり有効な情報とあまり有効でない情報が混じっている状態。有効に活用できている部分と、そうでない部分がある。有効に活用できる部分と、新入生約100人全員の幼稚園と連絡をとるが、どちらかというとなりのほうが大きい。また、移行支援シートや就学支援シートは、必要だと思う児童が作成されていなかったり、あまり必要ではないが保護者が心配で持参される方もいる。

◆移行支援シート、就学支援シートによる引き継ぎが有効だということを示していき、すべての園で有効活用していただけるという広がりができてくるのではないか。

◆移行支援シートについては、療育支援ネットワーク会議でどう活用するかはたびたび議論になっている。幼稚園や保育園でかなり記載されている内容にばらつきがあり、また園の運営方針がかなり違うのが実情。そもそも園がどういう集団行動を求めているかということでも違う。また、個人情報ということで保護者を介するしかない状況。保護者が自分の子どもについて問題だと思っていない場合、移行支援シートは作成されない。保育要録をすべて読んでいない状況で、明確に障害があるとわかっていて幼稚園と小学校と連携がとれてうまくいっている例、小学校と保護者で情報交換しながらうまくいけるが、問題なのは移行支援シートが作られない子供であり、そのような幼児はうまくつながらない。移行支援シート等を使用した引き継ぎ率を100%にあげるとあるが、どういう子どもを母数とするのか。

(4) 幼稚園教諭等の資質向上について

◆各園に通常学級と通級指導教室があるのであれば、自分の園だけでなく、他の園を巡回し相談を受けられるような役割を担うと、私立の幼稚園からの相談にもつながるのではないか。講座を受講する研修でなく、出向いて指導するのは指導者本人の資質向上にもつながる。

◆小学校も互いに他校の校内研修講師として参加する。熊本県の初任者研修だが、小学校で1日教育実習というクラスにはいってもらって支援員のように過ごす。逆に幼稚園に1日実習をしている。1日の流れの中での様子を見ている。幼稚園も切り取った保育を見てみると、ただ遊んでいるだけと思っているが一日の流れすべてにおいて人権的な研修や指導をしている。小学校にあがったら、1回1回自分の思いを受け止めてもらえないこともあるし、それで育っていく。支援に入るという研修で互いの理解を深めるのも必要。

◆各園で人員をフリーに入れてベテラン先生に初任の先生をつけて指導をするとレベルの均等化が図れると思う。保護者としては、今の状態で研修を増やすと先生方が余裕がなくなるのではないかと懸念している。

◆OJTは具体的にどのような形か。互いに学びあい、特別支援学校免許をもって互いに磨いている。他の特別支援、障害をもった幼稚園、保育園の担任支援をしていただけたら。

◆小学校1年生の行き渋りがあり、だいたい2年生から慣れてくると聞いている。市立幼稚園だけでなく、私立幼稚園も垣根を越えて、小学校の先生が幼稚園で体験授業をやってほしいと思う。児童発達支援事業、ことばの教室、あゆみの教室の垣根を超えた研修ができると相乗効果が期待できると思う。

◆令和3年度に第2次熊本市特別支援教育推進計画が策定されている、その中に小中学校及び幼稚園含め連続性のある多様な学びの場を用意し、またインクルーシブ教育システム構築においては同じ場でともに学ぶことを追求するとある。それを踏まえて、切れ目ない一貫した支援体制を構築するということは、小学校の先生が幼稚園にきたり、幼稚園の先生が小学校に来たり、そういうことが大切である。本園でも、月に1回、作業療法士の先生や言語の先生に来てもらっている。また、子ども発達支援センターにおいても、10年ほど前から各園に特別支援教育のコーディネーターを養成するコーディネーター養成研修を行っている。そういう学びや外部との連携を深めて、連続した発達を見守ることが大事。

◆専門的な知識、資質を身につけるのは重要である。現在示されている案は浅く広く知識を習得させようとするものである。教育センター所管の研修は主に小学校中学校の先生を対象とした初級編の話。特別支援学校の免許は3年以上の勤務経験と6単位。12日間の座学。どうしても認定講習の中で伝えられることには限りがある。小学校中学校高校を含め、幼稚園の発達段階を合わせた専門的な知識を身に付けられるか疑問。OJTで身に付けるしかない。現場の中で他の先生に教えられる人、コアになる人をしっかり育てていく将来的長期的ビジョンが必要。そういう人を採用する、専修免許、熊大に1年間派遣、あおば支援学校など、1名でもいいし人数は少なくとも深く学べる人が必要。

◆特別支援の専門性ということだと、ことばの教室、あゆみの教室を拡充していこうということになっているが、言語、情緒の両方兼ね備えたひとを育てるのは難しい。特別支援学校免許も専門が分かれている。子どもの状況によって互いに移籍できるような形が望ましいのではないかと。ことばの教室の先生と、あゆみの教室の先生と互いに理解は必要だと思うが、一体的にするのではなく、別にする意味を考えるべき。

◆特別支援教育に力を発揮できる先生、質と量という観点があったと思う。

◆実習指導の巡回の先生から幼稚園や保育士の免許の卒業生が特別支援、児童発達支援センターで働きたいという先生のために、幼稚園や保育士だけの学びだけでなく基礎的な基盤的な学びがあった方がいいという話もあった。学生の確保という側面もあるが、学生側のニーズもありそういう教育課程を作られるのでは、質の確保とともに量の確保も大事になるのでは。

◆浅く広く知るといより各園に1名専門性の高いコーディネーターを配置。特別支援委員会のようなものが各園にあり、あゆみの教室ことばの教室など全職員がかかわるという方向性が必要。

◆公立保育園においても、児童発達支援事業に取り組んでいる。中央が基幹的役割を担っており、実際の療育に関する基礎研修を企画実施している。研修の受け入れ人数が少なくすべての希望者を受け入れることが難しい状況。訪問事業も実施しており、私立保育園も対象である。

◆ことばの教室、あゆみの教室については、通常の学級にいる幼児である。特別支援学級のコアの先生も必要だが、全員が通常学級の中で一緒にいる子どもを見たり、また全員がそのような視点が必要だと思う。通常学級の中にいる支援の必要な子どもの保育を提案できるといいのではないかと。

◆広く浅くもちろん必要であり、その中でコアになる人も必要である。特別支援学級の設置であっても、通常学級に重度心身障害児や医療的ケア児の受け入れ体制を整備するであっても、重度のこどもを受け入れる体制をいつか将来か徐々にのこは分からないが、非常に重度であっても対応できるぞという深い研修を受けた人が必要である。特別支援学校教免許で重複については6時間の講義を受けた人は担任ができる。全員にしっかりとその視点

をもってもらふことは、熊本市全体の幼児教育・保育の資質向上につながる。

◆特別支援学級の授業研修では、研修内容は特別支援学級の授業だが、他の担任の先生方の学びがすごく大きいと感じている。

◆ことばの教室には、言語聴覚士の先生が1名いるが、専門職の存在が非常に大きい。ことばの教室においては言語聴覚士の配置がありがたい。

◆現場では、ダンスフェイスが必要であったり、ビジュアルが必要という一人ひとり違うという認識が全員に必要。聴覚過敏など個々にみる研修が必要であると思う。

◆重複障害の担任は6時間の講習を受ければなれると聞いて不安になった。特別な支援が必要な子どもと共に育て将来的にフルインクルーシブとなるとそれぞれの子もたちの生き方を共有できる子育てができれば社会的に進んでいく。

◆障害を持った方と一緒に学ぶのは非常に大事と思う。多様性があるのが普通、子供、それを見守る大人、広く先生方を配置、人員を配置する際に保育士不足ということが出来るのか、そもそも確保できるのか。

◆先日の園長会の意見であるが、幼稚園がやっていることをオープンにし、日にちを問わず、幼稚園の保育のありのままを見ていただくことは、市立幼稚園に大きな負担もなく取り組めることではないか。他の幼稚園の保育をみることで、自分の保育を顧みることができるのではないか。また、吃音の子どもの対応については、知っていただくことは非常に有効だと思う。

◆城南町が近年人口が増えており、保育園に落ちたので隈庄幼稚園にきたという話もあり、隈庄幼稚園があるから待機児童がなくなると認識している。できれば、隈庄幼稚園は、6クラスの組数は今のところを維持していただきたい。